

QR Newsletter

第四紀通信

Vol.1 No.3, 1994



July 1, 1994

第四紀学会1994年大会	2
テフラ研究委員会から	9
自然史学会連合準備会の報告	11
中・下部更新統境界に関する 現地討論会のご案内	12
国際研究集会のご案内	12
学術会議だより	13
学会記事	15
会員消息	15

Inter-INQUA Workshop on Tephrochronology,
Loess and Paleopedology 巡検報告参照

日本第四紀学会 1994年大会 (総会・研究発表会) [第3報]

1. 日程

1994年8月26日(金) 9:30~17:27 一般研究発表 [終了後:評議員会]

8月27日(土) 9:30~17:27 一般研究発表・総会 [終了後:懇親会]

8月28日(日) 9:30~17:30 シンポジウム

8月29日(月)・30日(火) 巡検

- *本年の大会は1会場で行われます。一般研究発表の時間は10分です(1鈴7分, 2鈴9分, 終鈴10分)。
- *発表者の大会のスライド枚数(OHPを含む)は, 一般研究発表が8枚以内, シンポジウム話題提供が20枚以内です。それぞれのスライドには, 講演番号, 映写順序, 氏名を記入し, 映写ホルダーの挿入状態で右上余白に赤丸をつけて下さい。スライドは, 発表の30分前までに会場入口のスライド受付係に提出して下さい。
- *OHPはご自分で操作して下さい。
- *ポスターセッションには, 横90cm, 縦180cmの発泡スチロールのパネルが1件につき2枚と, 張付用のセロハンテープが用意されています(パネルは屏風のように張り合わされています)。ポスターの展示は, 8月26日(金)10時から27日(土)17時まで可能です。なお, 26日(金)12時までに展示を完了させ, 発表者が質問等を受ける時間帯も掲示して下さい。

2. 会場(案内図参照)

東京都立大学講堂(〒192-03 八王子市南大沢1-1)

大会準備委員長: 町田洋(東京都立大学理学部地理学教室)

[交通案内]

京王相模原線「南大沢駅」より徒歩3分

3. 日本第四紀学会1994年度総会

- 1)1993年度事業報告
- 2)1993年度決算報告・会計監査報告
- 3)1994年度事業計画および予算案
- 4)その他

4. 懇親会

日時: 8月27日(土)18:00~20:00

会場: 東京都立大学国際交流会館

会費: 5,000円(一般)、4,000円(学生・大学院生)

*大会当日に会場にて受け付けます。

5. 巡検

案内者: 山崎晴雄・町田洋(都立大)・水野清秀(地質調査所)

テーマ: 「伊豆半島北端部プレート衝突域の第四紀地史」

地形図: 20万分の1 東京, 横須賀, 甲府, 静岡(巡検地域全体)、2万5千分の1 平塚, 秦野,

小田原北部, 伊勢原, 山北, 駿河小山, 御殿場, 吉原, 蒲原, 入山瀬, 富士宮

日程: 8月29日(月)~30日(火) 1泊2日(バス使用)

- 29日 田園都市線南町田駅発→東名・小田原厚木道路にて大磯丘陵へ→大磯丘陵の第四系と地殻変動
(東部, 曾我山砂利採取場, 丹沢川) →松田山または大野山→駿河小山付近の第四系→(泊)
- 30日 駿河小山発→御殿場→東名高速にて富士→富士山南西麓地域(羽謝および蒲原丘陵)の活断層と地
殻変動→新幹線新富士駅着→横浜線・田園都市線長津田駅着
- 集 合: 8月29日(月)8時30分 <場所> 田園都市線南町田駅前
宿泊場所: 小山町ワサビ平 企業研修施設
- 解 散: 8月30日(火) 新幹線新富士駅 16時30分, 横浜線・田園都市線長津田駅 19時30分頃
- 費 用: 概算20,000円(宿泊費+バス使用料) 募集定員: 25名
- *すでに申込者数が定員を超えています。今後の申し込みの方はキャンセル待ちとなりますので、御了承
下さい。

6. その他

- *シンポジウム・巡検・一般研究発表関係の問い合わせ先については、大会お知らせ第2報(第四紀通信
Vol.1, No.2)をご覧ください。
- *夜間集会などで会場を希望される方は、(1)集会名と目的、(2)開催希望時間、(3)予定参加人数、(4)責任者
名および連絡先を明記の上、葉書またはFAXにて、8月10日までに下記会場係(菊地)あて御連絡下さ
い。できる限り便宜をお図りします。
- *その他会場に関する問い合わせまたは連絡は、下記あてお願いいたします。
[会場係連絡先] (8月25日以前)
- 192-03 八王子市南大沢1-1 東京都立大学理学部地理学教室 (FAX 0426-77-2589)
菊地隆男 (TEL 0426-77-2590) または 鈴木毅彦 (TEL 0426-77-2594)
電子メールアドレス (suzuki@geog.metro-u.ac.jp)
- [大会本部連絡先] (8月26日~28日, 大会期間中)
第四紀学会大会実行委員会 (TEL 0426-77-2048)

8月28日(日) 9:30~17:30

シンポジウム「高精度年代測定と第四紀研究」

- オーガナイザー: 町田洋 (都立大学)・大村明雄 (金沢大)
- S1 9:30~9:55 シンポジウム「高精度年代測定と第四紀研究」基調報告.....町田洋 (都立大)
- S2 9:55~10:20 日本における年輪年代法.....光谷拓実 (奈良国立古文化財研)
- S3 10:20~10:45 天然の「時計」・「環境変動検出計」としての湖沼堆積物.....福沢仁之 (都立大)
- S4 10:55~11:20 氷河・氷床コアの年代決定と地球環境研究.....藤井理行 (極地研)
- S5 11:20~11:45 高精度年代決定のためのいくつかの方法について.....古城泰 (早稲田大)
- S6 11:45~12:10 第四紀における石灰質ナンノ化石基準面.....高山俊昭 (金沢大)
- S7 13:10~13:35 α スペクトル $^{230}\text{Th}/^{234}\text{U}$ 年代測定法の分解能と信頼性
.....大村明雄・伊勢明広・佐々木圭一・新坂孝志・長谷部由美子 (金沢大)
- S8 13:35~14:00 熱ルミネッセンス年代測定-特に火山岩類の測定精度について-高島勲 (秋田大)
- S9 14:00~14:25 加速器質量分析 (AMS) 法による ^{14}C 年代測定の高精度化の検討
.....中村俊夫 (名古屋大)
- S10 14:35~15:00 第四紀テフラのジルコン, ガラス (ZFTD/ITPFT) のFT年代測定
.....檀原 徹 (京都フィッシュン・トラック)
- S11 15:00~15:25 ESR年代測定法の現状と問題点.....池田すみ子 (地質調査所)
- S12 15:25~15:50 第四紀研究におけるK-Ar法の過去・現在・未来.....板谷徹丸 (岡山理科大)
- 16:00~17:30 コメントおよび総合討論

8月26日(金) 9:30~11:54

一般研究発表(1~12)

- 1 9:30~9:40 カトマンズ盆地(中部ネパール)における、走査型電子顕微鏡を用いた精密な花粉分析学的研究
中川毅(京都大)・安田喜憲(国際日本文化研究センター)・田端英雄(京都大)
- 2 9:40~9:50 トルコ・北アナトリア断層トレンチ調査地点の花粉化石にみられる歴史時代の環境変化
奥村晃史(地質調査所)・五十嵐八枝子(アースサイエンス(株))
 (9:50~9:54 討論)
- 3 9:54~10:04 北海道南西部における最終氷期以降のブナの出現時期
滝谷美香(北海道教育大函館校)・萩原法子(札幌第一高)
- 4 10:04~10:14 青森市西部小三内遺跡周辺の完新世植生史と環境変動
辻誠一郎・植田弥生(大阪市大)・南木睦彦(流通科学大)
- 5 10:14~10:24 白山における完新世の植生変遷.....矢笠登美子・遠藤邦彦(日本大)
 ・辻誠一郎(大阪市大)・東野外志男(石川県白山自然保護センター)
 (10:24~10:30 討論)
- 6 10:30~10:40 蛇石大池湿原40mコアの層序と花粉分析.....叶内敦子・杉原重夫(明治大)
- 7 10:40~10:50 西三河平野、碧海層の花粉組成と最終間氷期の気候変動.....森山昭雄(愛教大)・伊勢野曉彦(サンコーコンサルタント)・谷口和穂(四日市市役所)・吉野道彦(名城大)
 (10:50~10:54 討論)
- 8 10:54~11:04 三方低地帯中部の完新世後半の木材化石群と古環境
植田弥生・辻誠一郎(大阪市大)
- 9 11:04~11:14 京都盆地南部旧巨椋池の形成について.....岡田俊子(奈良女子大・院)
 (11:14~11:18 討論)
- 10 11:18~11:28 宮津市、大フケ湿原の堆積物(1)地形とテフラ
野村亮太郎(神戸大)・小滝篤夫(府立福知山高)・井上陽一(府立綾部高)・野口寧世(河合塾)・相馬秀廣(奈良女子大)・高原光(京都府大)
- 11 11:28~11:38 宮津市、大フケ湿原の堆積物(2)花粉分析
高原光(京都府大)・小滝篤夫(府立福知山高)・井上陽一(府立綾部高)・野口寧世(河合塾)・野村亮太郎(神戸大)・相馬秀廣(奈良女子大)
- 12 11:38~11:48 宮津市、大フケ湿原の堆積物(3)珪藻・昆虫遺体
井上陽一(府立綾部高)・小滝篤夫(府立福知山高)・野口寧世(河合塾)・野村亮太郎(神戸大)・相馬秀廣(奈良女子大)・高原光(京都府大)
 (11:48~11:54 討論)
 (11:54~13:00 昼食)

8月26日(金) 13:00~17:27

一般研究発表(13~33)

- 13 13:00~13:10 中国、太湖の成因と環境変遷-主として珪藻分析による-.....村田泰輔(埼玉大)・遠藤邦彦・片瀬隆雄・綿貫拓野(日本大)・海津正倫・大平明夫(名古屋大)・磯望(西南学院大)・兪立中・鄭祥民(華東師範大)
- 14 13:10~13:20 タクラマカン砂漠における風成環境の変遷
印牧もとこ・遠藤邦彦・浜田誠一(日本大)
 (13:20~13:24 討論)
- 15 13:24~13:34 過去145,000年間の琵琶湖湖底における風成石英の堆積量.....肖举楽(中国科学院)・井内美郎(地質調査所)・益田晴恵・熊井久雄・吉川周作(大阪市大)
- 16 13:34~13:44 最終氷期以降の日本海大和海盆堆積物中の石英含有量変化
濱田誠一(日本大)・池原研(地質調査所)・遠藤邦彦(日本大)

- 17 13:44~13:54 日本海の更新世堆積物の粘土鉱物組成からみた氷期-間氷期サイクル
福沢仁之(都立大)
 (13:54~14:00 討論)
- 18 14:00~14:10 種子島におけるテフラ層中の広域風成塵の特性とその堆積速度
井上克弘(岩手大)
- 19 14:10~14:20 関東ローム層中に含まれる微細石英の堆積速度の約10万年間の変化-北関東喜連川丘陵早乙女の例-
吉永秀一郎(森林総合研究所)
 (14:20~14:24 討論)
- 20 14:24~14:34 ローム層の特徴とその成因.....早川由紀夫(群馬大)
- 21 14:34~14:44 火山灰土の認定とテフラ層序区分-北海道南部におけるテフラ層序の再検討-
山縣耕太郎(上越教育大)
- 22 14:44~14:54 大阪湾と周辺部コアにみられる興味ある二三の更新世火山灰層
西田史朗(奈良教育大)・中世古幸次郎(地盤地質研究室)
 (14:54~15:00 討論)
 (15:00~15:15 コーヒーブレイク)
- 23 15:15~15:25 磐梯火山周辺に分布する広域テフラ.....鈴木毅彦(都立大)・木村純一(福島大)・早田勉(古環境研究所)・千葉茂樹(猪苗代高)・小荒井衛(国土地理院)・新井房夫・吉永秀一郎(森林総研)・高田将志(東大)
- 24 15:25~15:35 磐梯火山南麓の岩屑流の発生年代について.....小荒井衛・津沢正晴・星野実(国土地理院)・中村洋一(宇都宮大)・鈴木毅彦(都立大)
 (15:35~15:39 討論)
- 25 15:39~15:49 福島県磐梯火山のテフラ-ローム編年.....木村純一(福島大)・千葉茂樹(猪苗代高)・佐藤美穂子(泉原小)・富塚玲子(新協地水)
- 26 15:49~15:59 福島県磐梯火山のテフラ-ローム層序と火山活動史.....千葉茂樹(猪苗代高)・木村純一(福島大)・佐藤美穂子(泉原小)・富塚玲子(新協地水)
 (15:59~16:03 討論)
- 27 16:03~16:13 榛名火山周辺の中期更新世の火山灰層
矢口裕之(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 28 16:13~16:23 東海層群大泉層の火山灰層序.....松葉千年(桑名市在住)
 (16:23~16:27 討論)
- 29 16:27~16:37 トカラ列島、諏訪之瀬島の第四紀テフラ.....森脇広(鹿児島大)・新井房夫
- 30 16:37~16:47 南九州、鬼界カルデラの籠港テフラ群の噴出年代
奥野充・中村俊夫(名古屋大)・小林哲夫(鹿児島大)
 (16:47~16:51 討論)
- 31 16:51~17:01 箱根火山南東麓真鶴半島周辺のテフラと溶岩
由井将雄(明大付属明治高・中)・関東第四紀研究会
- 32 17:01~17:11 山中湖底で発見された富士山の側火山
遠藤邦彦・田場穰・安井真也・坪井哲也・林武司(日本大)
- 33 17:11~17:21 火山体の巨大崩壊の崩壊方向と広域応力場との関係の再検討
中垣幸恵・横山俊治(川崎地質株式会社)
 (17:21~17:27 討論)

8月27日(土) 9:30~10:54

一般研究発表(34~40)

- 34 9:30~9:40 シラカシ林におけるシラカシの花粉粒生産速度の推定
清永丈太(東京都・多摩都市整備本部)
- 35 9:40~9:50 タケ類の植物珪酸体含有率と年間生産量
鳥居厚志・井鷲裕司(森林総合研究所関西支所)

学会からのお知らせ

(9:50~9:54 討論)

- 36 9:54~10:04 檜穂高連峰主稜線部における岩石の風化に対応した地衣類の出現
.....岩船昌起(東北大・院)
- 37 10:04~10:14 月山における3~2kaの地形形成環境の変化(予報)
.....荻谷愛彦(都立大・院)

(10:14~10:18 討論)

- 38 10:18~10:28 受熱土の探査のための分析法.....渡辺栄次(国立名工研)
- 39 10:28~10:38 第12次野尻湖発掘における考古学的成果
.....渡辺哲也(野尻湖博物館)・野尻湖発掘調査団
- 40 10:38~10:48 縄文時代姥山貝塚人にみられたタウロドンティズムについて
.....藤田 尚・鈴木隆雄(東京都老人総合研究所)・針原伸二(東京大)

(10:48~10:54 討論)

(11:00~12:00 総会)

(12:00~13:00 昼食)

8月27日(土) 13:00~17:27

一般研究発表(41~61)

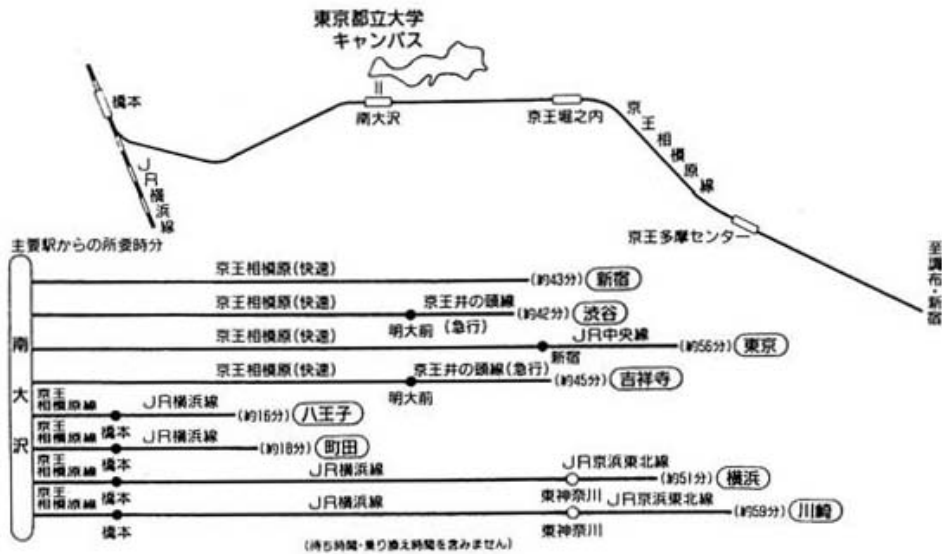
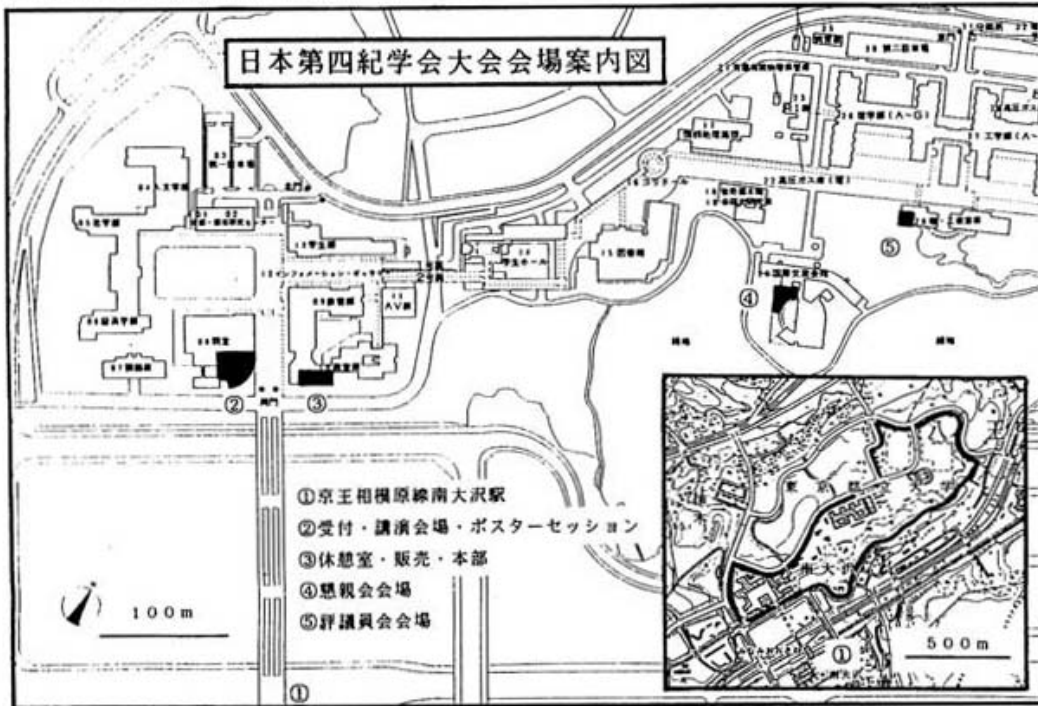
- 41 13:00~13:10 神奈川県伊勢原市引地遺跡の過去3回の地震の痕跡
.....上本進二(神奈川県立旭高)・中村喜代重(引地遺跡調査団)
- 42 13:10~13:20 濃尾平野の遺跡における古地震の痕跡
.....服部俊之(愛知県埋蔵文化財センター)
- 43 13:20~13:30 海成段丘面の変形からみた津軽半島の第四紀地殻変動史.....吾妻 崇(専修大・院)
(13:30~13:36 討論)
- 44 13:36~13:46 ITP-FT年代測定のための年代標準試料について
.....北田奈緒子・弘原海清(大阪市立大)
- 45 13:46~13:56 パプアニューギニア, ヒュオン半島のサンゴ礁段丘形成年代-更新世サンゴに関する α スペクトル ^{230}Th / ^{234}U 年代測定の再検討-
.....佐々木圭一・大村明雄(金沢大)・Malcolm McCulloch・
Tezer Esat・John Chappell・Brad J. Pillanz(オーストラリア国立大)・太田陽子(専修大)・
中森 亨(東北大)・松田進也(琉球大)・Kelvin R. Berryman(ニュージーランド地質・
核科学研究所)・John Pandlfi(オーストラリア海洋研究所)
(13:56~14:00 討論)
- 46 14:00~14:10 最終氷期以降の海水準上昇に伴う浅海域での化石密集層の形成について
-オーストラリア・クイーンズランド州東岸沖-
.....蚊爪康典・小西健二(金沢大)・辻 善弘(石油開発情報センター)・
松田博貴(石油公団技術センター)・本田信幸(合同石油開発)・
Peter J. Davies(シドニー大)・John F. Marshall(オーストラリア地質調査機構)・
佐藤由理(日本オイルエンジニアリング)
- 47 14:10~14:20 完新世のパラオ諸島堡礁の形成過程と海面変化.....茅根 創(地質調査所)
(14:20~14:24 討論)
- 48 14:24~14:34 西九州の完新世海水準変動と古潮位
.....横山祐典・奥野淳一(熊本大)・前田保夫(山形大)・長岡信治(長崎大)・
中田正夫(九州大)・松本英二(名古屋大)・松島義章(神奈川県立博物館)
- 49 14:34~14:44 有明海北岸における過去数千年間の海岸線変化と海面高度分布からみた地域変動
.....下山正一・松本直久(九州大)・湯村弘志(川鉄商事)
- 50 14:44~14:54 対馬周辺海域の沈水海成段丘と後期更新世の海面変動
.....菊地隆男(都立大)・田辺智子(日中平和観光)

- (14:54~15:00 討論)
- (15:00~15:15 コーヒーブレイク)
- 51 15:15~15:25 相模川下流の埋没段丘から示される「立川期」の海面変化
.....久保純子・吉山昭(都立大・研)・町田洋(都立大)
- 52 15:25~15:35 東京低地東部の沖積層と中期更新世堆積サイクル
.....杉山雄一・遠藤秀典・佐藤喜男(地質調査所)
- 53 15:35~15:45 鬼怒川低地における完新世の最高海水準と古環境
...増測和夫(川崎市青少年科学館)・関本勝久(地質工学研究所)・杉原重夫(明治大)
- (15:45~15:51 討論)
- 54 15:51~16:01 東京低地における王子埋没段丘の地質層序と¹⁴C年代
.....嶋田繁(明治大・院)・中野守久(北区教育委員会)・
増測和夫(川崎市青少年科学館)・叶内敦子(明治大・兼)・杉原重夫(明治大)
- 55 16:01~16:11 滝野川泥炭層の形成年代とその意義-石神井川の流路変遷における考察
...中野守久(北区教育委員会)・増測和夫(川崎市青少年科学館)・杉原重夫(明治大)
- (16:11~16:15 討論)
- 56 16:15~16:25 現行の土壌分類の方法は第四紀学において意味があるか? -北海道北部, 浜頓別の
堆積性の重粘性土壌を例にして-.....三浦英樹(都立大・院)
- 57 16:25~16:35 上部更新統・石狩高岡層の堆積過程と古環境.....小松原琢(東北大・院)
- 58 16:35~16:45 北海道夕張川の河岸段丘.....吉山昭(都立大・研)・
小澤昭男・柳田誠(アイエヌエー)・小野有五(北海道大)・清水長正(明治大・非)
- (16:45~16:51 討論)
- 59 16:51~17:01 関東山地に続く加治丘陵・前ヶ貫丘陵の飯能層について
.....加賀美英雄(城西大)・岡野裕一(三郷北高)・
 田正一(早大本庄高等学校)・松本昭二・阿比留稔・須田邦彦(飯能市役所)
- 60 17:01~17:11 越後平野地下の第四系.....小林巖雄(新潟大)
- 61 17:11~17:21 古琵琶湖層群堅田累層の堆積層.....山崎博史(琵琶湖博物館準備室)・
 田中淳(大阪市大)・田中里志(京教大)・比松昌彦(大阪市大)
- (17:21~17:27 討論)

ポスターセッション

- P1 十和田火山テフラ分布域における最終氷期最寒冷期後半の土壌生成と植生履歴
.....細野衛(新座高)・佐瀬隆(一戸高)・溝田智俊(岩手大)・
 青木潔行(相模原高)・木村準(盛岡南部土地改良事務所)
- P2 榛名火山の後期更新世末から完新世の噴火史
.....新井雅之(安中市立第二中)・矢口裕之(群馬県埋蔵文化財事業団)
- P3 中之条盆地の中部更新統の層序と植物化石
.....北爪智啓・高橋誠(群馬県立自然史博物館建設準備室)・
 磯田喜義(東京農大二高)・榛名団体研究グループ
- P4 東京低地北部毛長川周辺の微地形と古墳時代の古環境
.....村石眞澄(山梨県埋蔵文化財センター)・久保純子(都立大・研)・
 橋本真紀夫(パリノ・サーヴェイ)
- P5 多摩丘陵と横浜地域の下部更新統上総層群に挟まれるテフラ鍵層の対比
.....高野繁昭(法政大)

(行事担当幹事)



切り取り線

☆総会に出席できない方は委任状を下記幹事会あてにお送り下さい

委任状

1994年 月 日

日本第四紀学会会長殿

氏名 _____

私は議長（または、 _____ 氏）を代理人と定め、
1994年度日本第四紀学会における一切の決議権を委任いたします。

送付先 113 東京都文京区本駒込5-16-9 学会センターC21 日本第四紀学会幹事会あて

International Inter-INQUA Field Conference and Workshop on Tephrochronology, Loess, and Paleopedology 国際集会報告

期日：1994年2月7日～2月12日

場所：Waikato大学（Hamilton, New Zealand）

Covener: Dr. David Lowe (Waikato University)

夏の盛りのニュージーランドにて標記のようなINQUAの3つの委員会（テフロクロロジー、レス、古土壌）の合同集会が開催された。会場は北島にあるHamiltonのWaikato大学である。Hamiltonは、ニュージーランド北島の北西にのびる角の付け根付近にある、人口約10万人の都市である。会期中の6日間の真中、2日間が野外巡検、その前後の計4日間が講演発表にあてられた。また、2月13日～2月17日にかけては、Taupo火山帯～Wanganui地域にかけてのオプションの野外巡検も組まれた。

登録参加者はconvenerの意向もあり、計62人であった。講演会場は意識的に一つにまとめられ、しかも講演時間は1件につき25分間と中身の濃いものであった。発表論文数は47で、内訳はテフラが26、loessが10、土壌が11という構成であった。

読まれた論文に言及すると、テフラ関連のものは、大御所から中堅研究者が半分、残り半分が学位を取得したばかりの若手研究者によるものであった。後者についてはとくにニュージーランド勢の活躍が目立った。ニュージーランドでの若手による研究は、野外調査を中心とした層序研究が目立ち、Bay of Plenty周辺における中期更新世テフラを含めた研究、Tongari Volcanic Centre起源のテフラに関する詳細な研究など、目を見張るものがあった。それらからは日本と同レベルかそれ以上という印象を受け、現時点における研究の進展速度という点では、ニュージーランドの方に確実に軍配が上がるようにも思える。研究者の絶対数が日本に比べて少ないことを考慮すると、ニュージーランドのテフラ研究はたいへんに健闘しているのではないだろうか？もっとも、テフラの研究者数と火山数の関係という比較をすれば、日本では1つの火山に対して数人～0人であるが、ニュージーランドでは1火山に数人以上は当たり前、ということがいえそうなので、単純な比較は難しい。

loessや古土壌の研究発表を聴いて、これらの分野では徹底的に分析を行なうという印象をもった。帯磁率や粘土鉱物の測定・定量をはじめ、かなり手法が確立されている一方で、それらの方法論に関する議論も奥深いものがある。これらについては野外巡検のおりにもたびたび話題になっていた。やや専門を離れた立場の人間としては、loess中の古土壌の認定はなかなか難しいように見える。露頭でみるとなんとなく上下に比べて色彩の濃い部位を古土壌とよ

んでいるようであるが、場所によりそれは見えたり見えなかったりする。少なくとも立川ローム層中にある暗色帯の方が明瞭である。徹底的に分析を行なう彼らは古土壌をどの様に識別・定義しているのだろうか。いずれにせよニュージーランドでtephric loess (volcanic loess) とよばれる堆積物を徹底的に調査研究している。これに対して日本ではこれとよく似た堆積物に火山灰土（いわゆるローム）があるが、その研究はしばらくの間、停滞気味であったのではないかと感じた。最近になり火山灰土から大陸起源の石英を認定する仕事もでてくるなど、火山灰土研究も新たな局面にさしかかっているように思うが、第四紀の環境変化を意識した研究はこれからであるように感じられた。また、自分自身を含めて、今回のworkshopをつうじ、火山灰土の研究の重要性を感じている日本人は多いようであった。

参加者の国籍は、ニュージーランド（27名）、日本（14名）、アメリカ（8名）、イギリス（3名）、オーストラリア（2名）、ドイツ（2名）で、カナダ、フランス、ベルギー、インド、中国、香港からは各1名が参加した。今回、日本人の参加者は14人とニュージーランドに次ぐ数であった。日本人はこのように一大勢力であったが、質疑応答を含めた議論では、充分参加していたとは言いがたい状況である。日本人の研究発表は、内容的には十分に他国の発表と渡り合えるものだけに残念な気がした。

開催中、参加者はWaikato大学の学生寮であるBryant Hallを宿舎とした。夏季休業中の学生寮は学生が締め出され、学会参加者などのための宿泊施設になるわけである。シャワー、洗濯室など必要最小限の施設は揃っており、個室もよく手入れが行き届いている。食堂はすぐ近くにあり、日常の食事からフォーマルなディナーまで提供可能になっている。簡単なバーもあり、ビールなど飲みながら食中、食後の会話を楽しむことができる。全体としてみて、国際学会を開くに十分な施設が整っており、これらの運営もとてもスムーズになされていた。会期中、ワークショップ、野外巡検ともにすべてのプログラムが順調にすすみ、快適にすごすことができた。これはconvenerであるWaikato大学のDavid Lowe博士（Commission on TephrochronologyのSecretary）の周到な準備とそれをサポートしたWaikato大学関係者によるところが大きい。ここで一参加者として感謝を述べたい。

（鈴木毅彦）

International Inter-INQUA Field Conference and Workshop on Tephrochronology, Loess and Paleopedology. Intra-conference and Post-conference Tour 巡検報告

今回のField Workshopでは、会議中に2日間と会議後に5日間の巡検が行われた。Intra-Conference Tourは会議が行われたHamiltonからの日帰り、Post-conference TourはHamiltonからWellingtonへの約700kmにわたる北島縦断のコースであった。7日間の巡検を通してさまざまなテフラ、loess、古土壌を見ることができた。また、ていねいな巡検案内書が用意され、露頭にはテフラ名やloessの番号を記した札を設置するなど、心配りがゆきとどいていた。

Intra-Conference Tour

Intra-Conference Tourには会議の参加者のほとんどが参加し、5、6台のバンに分乗して行動した。案内者はD.J.Lowe, R.M.Briggs, N.M.Kennedy, I.A.Naimらであった。

第1日目は、Hamiltonの西約50kmにあるAlexandra火山群の中のMt. Karioiへ向かった。Alexandra火山群は、Taupo火山群(TVZ)と直行する方向に並ぶ古い火山列である。途中、この地域のテフラの模式露頭を見たが、230万年前から現在までの風成堆積物とテフラ(主にTVZ起源)がほとんど欠損なく整然と堆積しており、そのうちのいくつかはproximal tephraとの対比ができていたり、年代が測定されているのを見て驚かされた。Mt.Karioiでは、海に面した半円形劇場風の侵食地形を下りながら、噴出物(calc-alkali~alkali玄武岩の溶岩とサージ、火砕堆積物)に関する岩石学的な説明を受けた。

Intra-Conference Tourの2日目は、1日目は逆に東のTaupo火山帯の中のRotoruaとHaroharoの両カルデラへ向かった。途中、2カ所でtephric loessの模式的な露頭を見た。これらの露頭を含め、今回の巡検ではloessと呼ばれる堆積物を多く見た。loessとは、地表を覆う未固結、細粒、無層理の風成の堆積物であり、構成物質の給源は、周辺の河床や、氷期に陸化した大陸棚と考えられている。loessのうち、主に火山性の物質から構成されているものは、tephric loessあるいはvolcanic loessと呼ばれ、loessの中の暗色帯はPaleosolと呼ばれていた。loessの層相は、淡褐色のものから暗褐色や赤褐色のもの、砂質のものから粘土質のもの、無構造のものからクラックやノジュールが発達したものやフラジ盤となっているものまで様々で、構成物質の供給源や、堆積地の環境によって層相が大きく変化していくのが、7日間の巡検を通して観察された。その中でも、火山周辺に発達するtephric loessは、日本の火山灰土と似ているというのが筆者の印象であった。火山灰土をはじ

めとする日本の土壌に、風成塵起源のものがあるかどうかについては議論があるが、ニュージーランドのloessに関する研究を参考に、日本の土壌を見直す必要があると感じた。この日は、このほかにMamaku Plateauのtoa地形や、Haroharo火山の完新世の噴出物を観察した。夜は、Rotoruaカルデラを一望することができる溶岩円頂丘の上にある、すばらしいレストランで夕食を楽しんだ。

Post-conference Tour

会議後の巡検の参加者は31人で、そのうち日本人は11人であった。第1日目は、Taupo火山の周辺で2万年前の大噴火以降のTaupo火山起源のテフラをC.J.N.Wilsonの案内で見てまわった。特に、テフラの区分は一回の噴火に対応して行わなければならないということを強く主張していたのが印象に残っている。これら新期のテフラの中には、G.P.L.Walkerらが詳しく研究し、よく知られている約1800年前の噴火の噴出物(Taupoテフラ)も含まれていて、火砕流のvencer depositや火砕流のインパクトで下位の地層が折りたたまれた珍しい構造などもみることができた。また、現在のTaupoカルデラを形成した約2万年前の大噴火で噴出したOruanuiテフラの火砕流堆積物も、この日観察することができた。このテフラは、降下堆積物が500km³、非溶結の火砕流堆積物が300km³という大規模なものである。降下堆積物は、ニュージーランドにおける最大級の広域テフラで、南島にまで分布し、重要な時間示標層となっている。今回の巡検でも各地でこのテフラを確認した。

2日目は二つの班に分かれて、一方はTongariro火山登山、もう一方はTongariro火山の南麓にあるRangipo Desertで、Tongariro火山やRuapehu火山をはじめとするTaupo火山群起源のテフラを観察した。筆者が参加したのはTongariro火山の登山である。

Tongariro火山は、標高2287mの成層火山で、山頂付近はいくつかの火砕丘や、小成層火山から構成されていて、霧島火山を少し小さくしたような火山である。このため、変化に富む火山地形を観察することができた。噴火の影響か、あるいは人間による山火事のためか、ほとんど裸地か草地で、登りはじめから下ってくるまで、常に周りの風景を見ながら歩くことができたのは、日本の山との大きな違いだった。

3日目にはTaupoから一気に南下して、北島の

backarc basinの一つ、Bay of Plentyに面すWanganui Basinに入った。3日目と4日目は、B.J. PillansとA. S. Palmerの案内でWanganui BasinのPlio-Pleistocene以上の海成堆積物とloess、そしてそれらの中に挟まるTaupo火山帯起源のテフラをみた。また、一面牧草地なので、見事な海成段丘の地形もよく観察できた。この地域のloessは、層準によって非火山性のloessであったり、火山起源の物質を多く含むvolcanic loessであったりするが、これはこの地域の北西に位置するEgmont (Taranaki) 火山の活動や、気候変化と関係があると説明された。loessや海成堆積物の層序は、酸素同位体のステージと対応して議論されていた。また、これらの堆積物の編年には、風成や川によって運ばれたTaupo火山帯のテフラが重要な役割を果たした。最近、火山ガラスを用いたフィッシュトラックの新しい方法 (IPTFT法) によって、従来のテフラの年代が再測定された結果、いくつかのテフラの年代が大きく変更され、それに伴ってこの地域の編年も大きく書き換えられた。これらのテフラの中には、2万年前のKawakawaテフラや37万年前のRangitawa Pumiceなどの大規模な広域テフラも含まれ、参加者の多くがサンプリングを行っていた。4日目には、Brunhes/Matuyama境界層

準の地層を観察したが、ここで案内者のPillansから、このWanganui Basinの第四紀堆積物に関する研究は、現在進行形で行われていることが紹介され、ぜひ海外の研究者もそこに参加して競い合ってほしいという話が印象的であった。5日目はWellingtonへ向かいながら、途中で乾燥した環境下で堆積したloessや、Wellington Faultの活動に伴って形成された断層地形および河川争奪の地形を観察した。

7日間の巡検を通して、ニュージーランド北島の第四紀に関する最新の成果が次々と紹介された。その中には博士論文やPost Doctorの若い人の仕事も多く含まれていて、新しいものを含めた可能な手法が試みられ、知識が次々と更新されていっている様子に感心させられた。このようなニュージーランドの活気ある第四紀研究の状況は、国外の研究者との交流が盛んに行われていることとも関係するのであろう。

最後に、今回の巡検は、周到な準備がされ、内容も豊富な充実した巡検であり、参加者全員が満足して巡検を終えた。この巡検を準備された方々や、案内者の方々に心から感謝する。

(山縣 耕太郎)

「自然史学会連合」準備会の報告

第四紀学会会長 相馬寛吉

此の件に就いては第四紀通信 (Vol.1, No.2, 1994, p.7) で、その概要をお知らせしましたが、第1回会合 (1994.5.20) が日本学術会議で行なわれました。多数の関連学協会の代表の出席者に依る、忌憚のない意見交換の結果、以下ようになりました。

- 1) 「自然史学会連合」の設立に向け古生物研連は世話役として設立案 (下記) を各学協会に提示し検討してもらおう。
- 2) 第2回会合 (1994.7.15) では「連合」の理念、活動方針などの討議を行なう一方、さらに、自然史に関心のある団体・個人に参加を呼びかける。

〈提示された設立案〉

組織：連合は自然史科学に関連する学協会によって構成する。参加は各学協会の自由意志による。
 目的：連合は学協会間で情報、意見を交換し、直面する環境・資源問題などに即した新しい総合的な自然史科学のあり方を考え、協力して研究教育環境の改善を計ることを目的とする。
 活動：上記の目的を達成するため、共同名による声明や具体案を持って各方面に働きかける。また、個々の学協会ではできないような共通する課題について共同でシンポジウム・講演会・啓蒙活動を行う。
 運営：当面は世話役に当たる学協会を選出して意見を集約する。その実務は学会連合が行い、関連する研連は連合の要請に応じて会合の場を世話し、学術会議への連絡や答申を行う。学協会間の連絡などに要する経費は、当面は団体・個人の寄付による。

上記に就いて御意見・御提案・御批判などありましたら会長、幹事長、または庶務幹事へ書面・口頭などで御寄せください。尚、第1回会合の、議事録も、それら3者の手元にあり、御申し出に依り人手可能です。

■中・下部更新統境界に関する現地討論会のご案内

1995年のINQUAベルリン大会まで、あと1年余りとなりました。先だって、INQUAのSubcommission on Major Subdivision of the Pleistocene委員長のProfessor G.M.RichmondからFaxでベルリンでこの委員会のシンポジウムを予定する、との提案がありました。今回のシンポジウムでは、房総とニュージーランドの侯補地と両方の話題提供をもって半日ないし一日の枠を取るというものです。国際模式地のひとつもない日本としては、ぜひこの境界の模式地を設定したいと思いますので、不足するデータを捕足して、かっちりした根拠をもってベルリン大会に臨みたいと思います。そこで、その準備もかねて、現地討論会を企画いたしましたので、多くの方に参加を呼びかけます。今までのデータをおもちの方はぜひこの機会に話題をご提供いただき、今後の調査や研究の具体的計画を策定することにご協力ください。

なお、今回の現地討論会のご案内は、従来の科学研究費総合研究B「国際第四紀学連合（INQUA）年代区分小委員会国内討論会の開催」分担者を中心とした第四紀学会「上・中・下部更新統境界に関する研究委員会」のメンバーのほかに、1992年のIGCのおりに実施された国際シンポの参加者と、その後参加を希望された方に送っています。事務局としては、さらに広く多くの方に参加を呼び掛けたいと考えていますのでお近くに興味をおもちの方で、協力していただける方がいましたら、お知らせください。

(熊井久雄)

日時：1994年7月9日（土）夕方17：00から10日（日）14：00解散まで

宿舎：民宿すえひろ。（泊3食付き6,000円）千葉県市原市朝生原886-2 電話0436-96-0845

JR五井駅から小湊鉄道で養老溪谷駅下車、徒歩7分

日程：9日（土）17：00 集合 18：30 討論会・現地討論会の計画検討 21：00 懇親会

10日（日）8：30 出発 9：00 現地討論会・試料採取 12：00 昼食 13：00 現地討論のまとめ

14：00 解散

申込先：〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138大阪市立大学理学部地球学教室 熊井久雄宛 fax06-605-2522

申込み締め切り1994年6月27日（月）

===== 国際研究集会のご案内 =====

(1995年開催の国際学会)

■International Association of Geomorphologists Southeast Asia Conference on Geomorphology IAG-SEA Conference

期日と場所：18-23 June 1995, Singapore

国内連絡先：中央大学理工学部地学教室 鈴木隆介

Tel 03-3817-1881, Fax 03-3814-0955

(1996年開催の国際学会)

■30th International Geological Congress

期日と場所：4-14 August, Beijing, China

連絡先：Prof. Zhao Xun, Deputy Secretary General, 30th International Geological Congress

P.O.Box 823, Beijing 100037, P.R. China

Tel 86-1-8327772, Telex 222721 CAGS CN, Fax 86-1-8328928

Symposia 15. Quaternary Geology

15-1 Sequence correlation between Quaternary marine and continental strata

15-2 Evolution of Quaternary paleoclimate and palaeoenvironment: glacial age and palaeomonsoon of Asia

15-3 Surficial geological processes and geomorphogeny

15-4 Palaeoanthropogenesis

15-5 Loess sequences in East Asia and other continents, and their environmental information

15-6 Archaeogeology; weathering and protection of historical remains

15-7 Quaternary mammals of East Asia: their origin and migration

日本学術会議だより

No.32

平成6年度予算(案)決定

平成6年3月 日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは、第16期の会員推薦関係費、アジア学術会議開催経費などを計上した平成6年度予算及び最近公表された「調査報告 我が国における学術団体の現状」等についてお知らせします。

平成6年度日本学術会議予算

平成6年度日本学術会議の予算額は、総額で12億128万7千円で閣議決定されました。前年度と比較して1億546万円の増。率にして9.6%の伸びです。これは、平成6年度が第16期の会員推薦期に当たり、会員の推薦に必要な経費、臨時総会及び臨時部会等の会員推薦関係費が8,048万1千円増額し1億5万5千円になったことが主な事由です。

また、アジア学術会議の開催に必要な経費が、前年度に引き続き2,219万5千円が認められました。

その他、平成6年度予算では、国際分担金の16団体に対する単位数の変更が認められ、国際会議の国内開催については、神経・筋、園芸学、錯体化学、心電学、情報ドキュメンテーション、病態生理学の6国際会議の開催を予定しています。

また、世界各地で開催される学術関係国際会議への代表派遣や二国間交流に必要な経費が計上されています。

平成6年度予算概算決定額表は、下表のとおりです。

(単位：千円)

事 項	前年度 予算額 A	平成6年度 予算額 B	比較増 △減額 C=B-A	備 考
日本学術会議の運営に 必要な経費	1,095,827	1,201,287	105,460	対前年度比較 109.6%
審議関係費	265,525	272,534	7,009	○地球圏-生物圏国際協同研究計画 (IGBP)シンポジウム、公開講演会等
国際学術交流関係費	221,254	226,646	5,392	
国際分担金	74,722	67,450	△ 7,272	
国内開催	73,543	86,172	12,629	
代表派遣	44,006	44,006	0	
二国間交流	6,823	6,823	0	
アジア学術会議	22,160	22,195	35	
会員推薦関係費	19,574	100,055	80,481	
会員推薦管理会	19,102	21,632	2,643	
推薦経費	472	57,629	57,393	
臨時審議経費	0	21,007	21,007	○臨時総会、臨時部会
一般事務処理費	589,474	602,052	12,578	

第4 常置委員会報告—調査報告 我が国における学術団体の現状(要旨)

平成6年1月26日

学会協会等の学術団体は各専門分野の学術の進展において重要な役割を果たしており、加えて、日本学術会議の会員候補者を推薦し、また、研究連絡委員会に委員を送るなど、日本学術会議の基盤となっています。第4常置委員会は、学術団体の活性化・活動強化等のための支援方策を検討するに当たって、学術全分野における学術団体の現状を知る必要を認め、調査を行いました。調査票は選択肢方式の9項目44設問にわたる詳細なものでありましたが、調査対象とした日本学術会議広報協力学術団体1069団体の70%にあたる750団体から回答を得ました。分析結果を対外報告「調査報告 我が国における学術団体の現状」として今回公表しました。

報告書は、(1)専門分野、(2)会員、(3)設置形態と組織形態、(4)活動状況、(5)国際性、(6)財政状態、(7)学術団体の属性にみる専門分野の類似性、(8)学術団体への支援について、及び「附属資料」よりなっています。報告では、学術団体の諸属性を、全団体平均に加えて、専門分野別と団体規模別に比較しています。63頁にわたる報告書の内容を簡潔に要約することは困難ですが、以下にその一端を紹介します。

学術団体の数は文学系及び医学系の分野で多く、法学系及び経済学系で少ない。2つ以上の専門分野にまたがる団体の割合は文学系及び医学系で少なく、理学及び工学で多い。平均正会員数は全団体平均で約2.5千人、人文科学部門で0.7～1千人、理学及び農学で1.7～2.5千人、工学及び医学系では約4千人である。

全団体の約20%が法人である。法人の割合は団体の規模の増大とともに急速に増加する。工学において特に高く、人文科学部門で低い。フルタイムに換算した事務職員数は正会員数に比例し、全団体平均でみれば正会員千人あたり0.71人である。事務所面積は正会員数に比例し、全団体についてみれば、基本面積が27㎡で、正会員千人あたり1.7㎡である。

会誌の発行は最も普遍的な活動で95%の団体に見られる。人文科学部門ではやや低く、理学及び工学においてやや高い。論文誌の発行は約27%の団体で行われており、経済学系、理学及び工学において割合が高い。書籍の出版は15%の団体で行われており、理学、工学及び農学で高い。その他の活動のうち、社会人教育は19%の団体で行われており、理学及び工学に多く、経済学系及び医学系で少ない。

国際集會を主催した経験をもつ団体は51%である。団体の規模が大きいほどその割合は高い。専門分野別で見れば、文学系及び法学系において低く、理学、工学及び農学で高い。国際集會を開催する上での困難の第1位は「経費の調達」で84%に達している。会誌あるいは論文誌を何らかの意味で国際的に開放しているのは85%の団体にみられる。

団体の財政規模を正会員数で割った額は全団体平均で29千円で、文学系及び経済学系において10～15千円、理学及び工学で高く48～57千円に達する。平成3年度における実質収支(繰り越しを除く)での赤字団体は全体の約3分の1であり、予算規模の10%以上の赤字をもつ団体が7%ある。外部からの支援を必要とする事業は、成果刊行が最大で60%、次が国際活動で30%である。団体の規模が大きくなると、国際活動への支援要求の割合が高まる。具体的な支援方策としては、学術団体の活動が円滑に進むよう制度等を整備する方法、特に、学術団体に対する課税及び学術団体への寄付者への課税を緩和する方策が効果的と考えられる。

終わりに、この調査に御協力を頂いた学術団体の担当者の方々に深く感謝申し上げる次第です。

第16期日本学術会議会員のための 登録学術研究団体の概況

日本学術会議では、現在、第16期(平成6年7月22日～平成9年7月21日)会員(定員210人)選出のための手続が進められていますが、その第1段階として、昨年(平成5年)5月末日を締切期限として、学術研究団体からの登録申請の受付が行われました。これらの登録申請については、日本学術会議会員推薦管理会において審査が行われましたが、その結果は次のとおりでした。

- ・申請団体数……………1110団体
- ・登録団体数……………1069団体

「日本学術会議だより」について御意見、お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(3403)6291

幹事会議事録

日時：1994年5月21日

場所：東京大学理学部地理学教室

出席者：相馬寛吉（会長）、上杉 陽、小池裕子、
齊藤亨治、坂上寛一、杉山雄一、池田安隆

報告事項

1. 庶務

学術会議第16期会員選出に関わる推薦人会議（第4部・地質科学・地球科学総合研究連絡委員会、定数1）が5月19日に開催され、新藤静夫氏が第16期会員として推薦された。

2. 編集

「第四紀研究」33巻2号には、原著論文3編、短報2編を掲載予定である；33巻3号は原著論文3編、資料1編、講座1編を掲載予定。

3. 行事

(1) 博物館見学会を「兵庫県立・人と自然の博物館」において1994年6月12日に開催することが決定した。案内状を5月中旬に126の研究機関宛てに発送する予定である。

(2) 1994年度大会（東京都立大学）の準備を行った（本号の大会関係記事参照）。

(3) 1995年度大会は、1995年8月下旬に新潟大学で開催する予定で準備を進めている。

4. 会計

(1) 「第四紀研究」への広告掲載依頼と賛助会員入会依頼を関連各社に発送した。

(2) 会員数の増加に伴い会誌のバックナンバーが不足しつつあるので、「第四紀研究」の印刷部数を若干部数増やすことになった。

審議事項

1. 学術会議地質科学総合研究連絡委員会は、科学研究費補助金の分科「地球科学」の中の細目「地質学」に、審査委員（第1段階審査）1名の推薦枠を有する。この推薦枠1名は、第四紀学会、応用地質学会、地下水学会、及び地熱学会の4学会から推薦された計4名の候補者の中から選ばれる。第四紀学会の推薦する候補者は、評議員による通信投票によって選出することとした。

2. 学会賞創設について引き続き検討を行った。現時点までの議論をもとに幹事会としての原案を作成し、評議員にアンケート発送し意見を求める。

3. 公開シンポジウム「日本列島における海岸環境の変遷」を、学術会議第四紀研究連絡委員会と共催で開催することに決定した（本号の関係記事参照）。

4. その他

幹事会の継続検討課題となっている「テフラ標準土

層集」の企画について、上杉幹事長が幹事会及び関係者の意見を集め、以下の案を提案した。タイトルは「日本列島第四紀重要露頭集、その1」とし、テフラを中心とした第四紀の重要露頭（断層露頭、化石産出露頭等も含む）を収録する。「第四紀研究」の特別号として出版し、会員には有料頒布する。編集委員（予定）は：貝塚爽平・町田洋・遠藤邦彦・熊井久雄・上杉陽・池田安隆。

鈴木敬治博士の逝去を悼む

本学会会員鈴木敬治博士は1994年1月23日午前0時13分膵臓ガンのため、福島市内の西部病院で亡くなりました。行年67才。

鈴木博士は会津若松市に生まれ、旧制山形高校、東北大学理学部地質古生物学教室卒業後、福島大学助手・講師・助教授・教授を経て、1990年3月に定年退官されました。その間、1970-1976と1982-1987の2度にわたり評議員を勤め、本学会の運営に参画されました。シンポジウム「最終氷期における動植物相と自然環境」・巡検を含む1980年8月22日～26日の年次大会を福島市民センター（飯坂町）で開催し、また1987年1月明大に於ける第3回本学会講演会では「会津盆地周辺の鮮新・更新統と古植生の時代的変遷」〈本学会誌、26（2）：163-168参照〉の演者を勤めるなど、本学会の発展と人材の育成とに尽力されました。

卒論（1950）として「会津盆地西方地域の地

質」から出発し、「東北南部地域に於ける中新世-鮮新世の植物相の地史的变化」の学位論文（1960）を提出した後は、自亜紀・古第三紀よりは、新第三紀、特に、当時急速に発展し始めていた日本の第四紀の研究に意欲を燃やし（ちなみに本学会は1956年4月29日発足）、福島県を中心に、層序、植物相・植生変遷の研究を行い、これを生涯続けられました。そしてINQUAのサブコミッション「鮮新統・更新統の境界問題」に、日本からの大阪・房総と共に会津の編年学的研究成果も多くの協力者を得て加へる事が出来る迄その精度を高められました（第一回コロキウム・1972、ソ連）。本学会誌を通じてその業績の一端を伺い知ることか出来ますが、他にも多数の論文、著書、報告書を世に送られております。

ここに生前の功績を讃え、心からご冥福をお祈り申し上げます。（相馬寛吉）

尾崎 博先生のご逝去を悼む

本学会創立時からの会員であり、第1期（1956年度から1958年度）と第3期（1962年度から1964年度）に評議員を努められた尾崎博先生は、1994年2月23日早朝、脳梗塞のために逝去されました。享年87才でした。

先生は、1907（明治40）年2月1日に鳥取県に生まれました。満州教育専門学校で学ばれ、当地で就職されましたが、1929（昭和4）年東北帝国大学理学部地質学古生物学教室に入学されました。1932年卒業と共に再び満州に行かれ、満州鉄道株式会社地質調査所に就職、その後満州鉱山株式会社の地質課長に就任、終戦まで満州における鉱山開発に力を注がれました。

終戦後満州から引揚げてこられ、1950年国立科学博物館に就職されました。博物館の仕事をなさりながら、銚子附近の地質調査を精力的におこない、「銚子地方の第三紀および第四紀層の層位的並びに古生物学的研究」によって1959年に埋学博士の学位を授与されました。また先生は科学博物館として花泉獣骨化石の発掘調査をおこなうなど、人類の出現に関する層位古生物学的研究に興味をもたれていました。この間第四紀学会の評議員として、生まれたばかりの学会の運営に参加され、その発展に貢献されました。また学術会議か

ら文部省に対して、「国立科学博物館に自然科学センターとしての機能をもたせるように」という勧告がなされたのをうけて、地学部長として科学博物館の拡充発展のために並々ならぬ尽力をなされました。

1971年に国立科学博物館を退職された後、斉藤報恩会自然史博物館に顧問としてかわり、その後館長として1992年まで努められました。先生は自然史博物館は研究の場であると同時に社会教育の場、地学の普及のためのセンターであるべきだという信念をもち、そのための努力を惜しみませんでした。日本各地はもとより台湾までも足をのばされ、公立私立をとわず自然史関係博物館の充実発展のために具体的な指導援助をなさっておられました。先生の努力は亡くなるまで続けられました。

先生は後半生をおもに博物館とのかかわりで過ごされましたが、第四紀が人類紀であるということから考えれば、人類文化の発展を支える分野にたざさわっておられたということは、一面で第四紀学を身をもって実践されてこられたともいえます。

先生の御冥福を心からお祈り申し上げます。

（竹内貞子）